

犠牲になる市民、奪われるかけがえのない命

シリアの 人びとの現在

政府軍と反政府軍との争いが続くシリア。
そのはざまに、武器をもたない市民が犠牲になっています。
シリアの悲惨な状況を変えるため、国際社会がアクションを起こすよう、アムネスティは訴え続けています。

4万人以上の死者

2012年11月下旬、シリアの首都ダマスカス近郊で、公園を狙ったとみられる政府軍の砲撃により、10人の子どもたちが死亡しました。子どもたちが遊んでいるところへ、政府軍の戦闘機がクラスター爆弾（コラム参照）を投下したのです。

政府軍と反政府軍との争いが始まった2011年3月以来、4万人以上の人びとが死亡しています。その中には、千人を超える子どもたちが含まれています。

同地では毎日のように、政府軍と反政府軍のはざまに、市民が爆撃を避けて逃げまどい、あるいは避難しようとして、自宅や街角で殺傷されています。

内戦の背景

2010年の年末にチュニジアで始まった民主化の波を受け、シリアでも2011年2月に抗議運動が起こりました。当初は、アサド大統領の退陣を求める小規模なデモでしたが、シリア当局が大勢の人

びとを逮捕したことをきっかけに、シリア各地の主要都市に抗議運動が拡大しました。

シリア当局は、戦車や大砲など軍事兵器を用いて、反政府軍を武力で鎮圧。エスカレートする治安部隊の暴力で、反体制派の武力勢力のみならず大勢の市民が虐殺されています。

この事態を受け、国連安全保障理事会は、アサド政権への制裁を盛り込んだ決議案を採決。しかし常任理事国のロシアと中国が拒否権を発動し、数度にわたり否決されています。

2012年7月には、国連の前事務総長であるコフィー・アナン氏が、シリア特使として内戦の仲裁を努め、停戦合意に

こぎつけたものの、停戦は無視され、泥沼化した内戦が続いています。

子どもの遺体を捜す親

紛争が続く地域の住民は、空爆の恐怖に怯えながら日々暮らしています。情け容赦のない無差別空爆と砲撃が、連日のように続くからです。

現地調査を行っているアムネスティの調査員は、空爆の被害にあったある一家の様子を次のように記しています。空爆の凄惨さを物語るものです。

“爆撃された建物の最上階に住んでいたある一家では、7人が殺害された。夫、妻、娘、2人の息子が殺害された。1人

クラスター爆弾

容器となる大型の弾体の中に、複数の子弾を搭載した爆弾。無差別に人を殺傷するため、世界的に使用禁止の流れが進んでいます。不発のままの子弾は、地面や草原に転がっていることが多く、子どもたちが大怪我を負うケースが相次いでいます。



不発のクラスター爆弾。シリア

Column 1



シリア軍の爆撃により破壊された住居。幼いわが子を抱えた母親は、バルコニーで立ち尽くしている。

の娘だけが生き残ったが、重傷を負い、片目を失った。子どもたちのいとこと、18カ月の乳児も犠牲となった。その両親も大怪我を負った。

爆撃の数時間後に現場を訪れると、親戚や隣人たちは1人の子どもを必死になって探していた。結局その3日後、その子の遺体が近くの建物の中から見つかった。爆風で遺体が飛ばされてしまったのだ。

親類の1人は「生き残った親戚の娘にはまだ、『両親も兄弟もみんな殺された』と告げる勇気がありません」と嘆いていた。「彼女は、いとこ2人が死んだのは知っています。それで、『私の家族はど

うなったの?』と聞くのです。本当のことは、どうしても言えません”

政府に「消される」市民たち

市民の命は、政府による拘禁時の拷問によっても奪われています。

「反政府側の支援者である」と疑われた人びとは、突然逮捕され、その多くは現在も行方がわかっていません。家族や弁護士は政府から情報をいっさい得ることができません。そのため、残された家族は、最愛の人の所在はもちろん、その生死すらもわからないのです。

強制的に失踪させられた人びとは、何ヵ



シリアとその周辺国の地図。反政府派の拠点アレppoでは、激しい攻防が続いている。負傷者らを収容している病院の空爆も相次いでいる。

月にもわたって秘密裏に拘禁され続け、拷問などの激しい暴力を受けています。

また政府軍によって拘束された人びとの中には、その場で処刑をされた人もいます。これまでにアレppo市郊外では、後ろ手に縛られ、頭を銃で撃たれた遺体がいくつも発見されています。こうして犠牲になった人びとの中には、反政府組織への関与を疑われた人だけでなく、政府軍の攻撃で被害を受けた市民を救援する医療機関の関係者や、ボランティア団体の活動家も含まれています。

反政府軍による暴力も

一般市民が犠牲となるおもな原因は、シリアの政府軍や親アサド政権の民兵組



(上) シリアのある家族の写真。8月20日、昼食の最中にシリア軍の空爆を受け、母親と娘、息子、それに7歳、8歳、9歳の甥が全員が死んだ。©private / (左) 病院で治療をうける6歳の男子。彼の3歳の弟は、爆撃によって死亡した。アレppoにて。



空爆によって破壊された住居。剥がれた壁が、その凄惨さを物語っている。



政府軍に処刑された男性の遺体。手を後ろで縛られているのがわかる。(c)private

織「シャビハ」による攻撃です。しかし、人権侵害を行っているのはシリア政府軍だけではなくありません。

反政府軍もまた、政府軍の兵士に対して拷問や殺害を行っています。そして彼らも政府軍と同様に、政府を支持していると疑われた一般の人びとを拉致し、殺害しているのです。

最近、「反政府軍が、捕虜を違法に殺害するなど戦争犯罪につながる人権侵害を公然と行っている」という情報が、多く寄せられています。2012年7月には、反政府軍によってシャビハ軍の構成員とその家族14人が拘束されました。その後、シャビハ軍が彼らを暴行し殺害する様子を映したビデオ映像が出回り、激しい議論を呼びました。

アムネスティは不偏不党・中立の立場から、政府軍と反政府軍の両者が加担する人権侵害を非難しています。

「どれほど血を流せば、世界は助けてくれるのだろう」

「アラブの春」の流れを受け、民主化を

目指して起こった今回の衝突。泥沼化した状況の中、次々と奪われていく、守られるべきはずの市民の命。こうしている間にも、残念ながら、シリアの人権状況は悪化し続けています。

この流れを変えるために、アムネスティは国連をはじめとする国際社会がアクションを起こすよう、繰り返し訴えて

きました。

いかなる勢力への武器の移転も禁止すること、政府軍と反政府軍の両者の罪を適切に裁くべく、国際刑事裁判所（ICC）にシリアの事態を付託すること（コラム参照）、そしてシリア政府が独立的かつ中立的な現地調査を認めることを、アムネスティは今後も引き続き訴えていきます。

「ICCに事態を付託」ってどういうこと？

Column 2

国際刑事裁判所（ICC）は、「戦争犯罪」「人道に対する罪」など、最も重大な犯罪を犯した個人を処罰するために設立された、常設の国際刑事法廷です。裁判所はオランダのハーグに置かれています。

ICCの役割は、あくまで各国の国内刑事司法制度を「補完」すること。関係国が被疑者の捜査・訴追を行う能力や意思がない場合のみ、管轄権が認められます。

ICCに「事態を付託」するということは、簡単に言うとICCに「事態

の解決を委ねる」ということです。ただし、事態を付託できるのは、ICCの締約国または国連安保理に限られます。

今回の場合、シリアは締約国ではないため、事態を付託できるのは国連安保理のみ。しかし、常任理事国のロシアと中国の消極的な動きにより、事態を付託するための決議を通すことができていません。そのため、国連安保理は「機能不全に陥っている」という批判を国際社会から受けています。

アムネスティの「報告書」を 見てみよう

アムネスティの調査員は、人権侵害が行われている現地に入り、現地で起こっていることを「報告書」にまとめます。長いものだと100ページを超える報告書は、年間に数十本発表され、時事を

報道するマスメディアの貴重な情報源となっています。

日本支部では、その一部を日本語に翻訳し、公開しています。報告書は、アムネスティ日本のウェブサイトの「ライブラリ」で閲覧することができます。今回の特集に関連した、シリアに関する報告書も公開されています。ぜひ、ご覧ください。

<http://www.amnesty.or.jp/library/report/>



シリアに関する報告書。現地の状況の詳細がわかる。